

男衾三郎繪詞詞書

小 引

- 一 是は淺野侯爵家所藏男衾三郎繪詞一卷の詞書である。
- 一 活字に移すに當つては、可及的原本の體裁を傳へんことを期し、行の體裁は勿論、不可思議なる振假名をもその儘に留めた。但し異體の假名は罷むを得ず現今通行のものに改め、その主なるものを此小引の末尾に表示するに留めた。難讀の文字は□を以てし、カを附して校者の意見を括弧内に旁記した。但しその際は摸本等をも参照したのである。
- 一 原本最初の體裁考察の一端に資するため、詞書料紙の繼目、詞書と繪との接續の關係を左の如き記號を以て表はした。

料紙繼目

- ~~~~~ 詞、繪の界が料紙の繼目に當り繪の一部にても詞書の料紙にかゝれる場合。かゝらざる場合は前者の記號。
- 詞、繪の界が料紙の繼目に當り、繪の起筆が明かにその繪の端を示せる場合。
- 詞、繪が同一料紙に跨り、兩者の界に罫線が引かれてある場合。

一 此詞書は他に國華第三九四號に收録されてある。

一 摸本の所在、その他此繪卷の一般的考察に關しては本號所載拙稿「男衾三郎繪詞」を参照されたい。(梅津)

異體假名表

牛井	ウマ	ケヤキ	サハ	シタ	スオキ
セオキ	ソダキ	タキ	ツハ	テ	ナ
ニヨ	ネ	ハ	ヒ	フ	ホ
マ	ミ	ム	メ	リ	

昔東海道のすゑに武藏の大介といふ大名あり

其子に吉見二郎をふすまの三郎とてゆゑしき

二人の兵ありけり常に聖賢の教をまもり侍ければ

よの兵よりも花^(族カ)□榮耀世にいみしくそ聞えける

吉見の二郎は色をこのみたる男にてみやつかへしける

□□上^(或カ)藤女房^{ギウ}を迎てたくひなくかしつきたてまつり

田舎の習はひきかへてゐぬすまひよりはしめて侍女

房にいたるまでことひはをひき月花に心をすまし

てあかしくらし給程になへてならすうつくしき姫君

一人いてき給へり觀音に申たりしかはやかて慈悲と

いはんとてさそなつけ給けるおとなしくなり給まゝ

にいとゝなまめき給へり八ヶ國の中に聞及て心を

かけぬ大名小名そなかりける其中に上野國難波の

權守か子息難波の太郎をむこになさんとして難波より

吉見へふみをかはしたればこれをはきらふへきに

あらずとて陰陽に吉日をみせられければ占申様

今三年と申八月十一日いぬの時^ツのよりこのかた吉日みえす

候といふにこの様を返事したりければ權守いつ

までも約束變改あるましくはとそ悅ける

(繪)

をふすまの三郎あにゝは一樣かはりたり弓矢とる物の
家よく作てはなにかはせん庭草ひくな俄事のあらん時乗
飼にせんとするそ馬庭のすゑになまくひたやすな切懸よ

此門外とをらん乞食修行者めらはやうある物そひきめかふら
にてかけたてゝおももの射にせよ若者共政すみ武勇の家

にむまれたれば其道をたしなむへし月花に心を

すまして哥をよみ管絃を習ては何のせんかあらん軍の

陣に向て筆をひき笛をふくへきかこの家の中にあらん

ものともは女めらへにいたるまでならふへくはこのみたし

なめ荒馬したかへ馳引して大矢つよ弓このむへし惣

しては兵のみめよき妻もちたるは命もろき相ぞ

八ヶ國の内にすくれたらんみめぬるがなとねかひて久目田の

四郎の女^{メス}を迎て夫妻とそたのまれけるたけは七尺はかりかみは

ちゝみあかりてもと取のきはにわたかまる顔には鼻よりほか又見ゆる

ものなしへ文字口なるくちつきよりいひいたすことはことにいつくしき

事はなかりけり男子三人女子二人いてき給へり

(繪)

かくて八月下旬の比吉見二郎兄弟大番つとめにとて京上せら

れけりみつの道の山賊とも七百人遠江のたかし山にて寄合つ□^(ハカ)

たからとらんとそまちうけたる大勢は宿々の煩なるへしとて

をふすまの三郎は一日さきたちてのほらる山賊共もきゝおそれ

てそとをしたてまつる後陣にさかりて吉見次郎一千余

騎にてのほり給吉見のめのとこうとう大夫正廣といふもの三

百余騎先陣の兵士にうちのほる昔よりこの山は聞ゆる所そとて

各物具そしたりける盗人たかし山の木のもとかやのもとにみちゝ

たり一のたうけなるとちの木の中よりくるかはおとしの甲の

ひつしはかりなるにあかおとしのかふときて山鳥のおのませはき

したる矢ぬりこめの弓にさしくはせて五十はかりなる

男のさしあらはれてすこしも恐たるけしきなくといふやうをとにもきかせ給らんこれそ海道にはたかしふたむら北陸道には野をみあらちの山に名をあげたる盗人の張本尾張國にき

(候力)

こえ□へんはいしやうしと申ものきみの御寶を給はり候はゞや

とてこれに候と云もはてさせて吉見郎等荒權守家綱と

いふものつよくひきとりてはうれほしかり申たからとらせん

とてはなつ矢にへんはいしやうしくひほねいさせてたう

れにけりやふれしやうしにはおとりたり其子二村太郎おや

をうたれてやすからす寶を取てもなにかせんとてひき

とり／＼はなつやに吉見御曹司よるひのひきあはせ射ぬ

かれて馬よりさかさまにおち給へはうとう大夫かたにひき

かけたてまつりて坂のしもへそくたりける荒權守是

を見て二村太郎に打合て生取にしてくひをきりなきなた

のさきにそつらぬきたるほめぬ物こそなかりけれ山賊共も

五百人はみなうたれぬ吉見の侍郎等も二百餘人はうたれにけり

先陣にのほるをふすまの三郎のもとへ早馬たてたりければ

此事聞ていそきうちかへる吉見次郎悦て遺言をせられける

三十六所の所知をは三郎殿にたてまつる其中一所と吉見の

家とは女房とひめとにたひ給へ正廣家綱には中田下郷を

たふへし各々これをたしかにきけ姫はしみはなち給なよ

これそこの世に思をく事とてつゐにはかなくなり給ぬ

(繪)

さてしもあるへきならねはとて三郎は京へのほらる武藏へは家綱片見と頸とをひたゝれにつゝみてもちつゝはせくたりけるか次日のくれ程にはするかのくに淨見關にそはせつき

たる馬よりおりてしはらくやすむ程にひとつのふしきそいてきたる夢ともなくうつゝとおほえすしてみきは

より海の中へ一町はかりありて浪の上に觀音の靈像現し

給てひたゝれにつゝみたるくひへひかりをさし給て

これは慈悲かなけきのあはれにおほゆれはまつたらく山へ

むかふるなりとおほせらるゝとおもふ程に程なくかけつ

やうにうせ給ぬたのもしさに悦のなみたをそなかしける

(繪)

武藏の吉見にはかゝる事とも知給はす夜もすからくまなき

月をなかめて女房たちおはしけるにひめきみの給やう

すきぬる夜のゆめに家綱かきたりつるか左の手にたか

をすゑて右の手にかふとをもちてありつるか鷹はそりて

西のかたへとひゆきかふとはつちにおちつるとの給へは

母うへきゝ給て弓とりはたかとみゆるは魂にてあんなり

かふとゝみゆるは頸にてあるなる物を何事のあるへき

やらんとむねうちさはき給程に曉かたに家綱きたりて

涙をなかしつゝこれ御覽候へ御館の御ありさまよとてくひとかた

みとをえんにさしをきて庭にたうふれふす女房おさなき

人々なみたにくれてかなしみ給ふ事かきりなし家綱ありつる

ありさま淨見か關の事を申にそすこしなくさみ給ける

(繪)

をふすまの三郎京よりくたりつゝいつしかあにの遺言をたかふるのみこそむさんなれ吉見のたちには我妻子をかしつきすゑて慈悲母ともにこの家をはいて給へ所知も

家も院より給はりたる物なれはおやと夫にわかれたる人はかゝる^(祝カ)の所には居さんなるそとて門外なるしつ

のふせやにおしこめたてまつるのみそなさけなかり

ける一人の女房をたにもつけさりけるこそかなしけれ

難波の權守傳聞てふみをつかはす様故吉見殿の御教養

これへいらせ給て訪まいらせ給へ女房姫君の御迎にまゐるへし

とかきてつかはすに使の案内をしらてうるはしく吉見の

館へもてゆきたりければをふすまの女房これを見て

三郎殿これみ給へみなしこの慈悲をこはんよりは我女を

こへかしわらはかはからひにして太難波太郎を^{三郎}にとら

むといひてふみかき難波へつかはす慈悲は母もろともに

思ひにしつみてはかなくなり候ぬいづれもおなし

女房なればこれのひめをまいらせんとかきたるに難波

權守これを見ておもひのほかの事かなとてえんより

しもへそなけまつるされはしに給にけるよとて難波

太郎二人の女房のためにとて堂をつくりそとはをたてゝ

あまり心のやる方のなさにふちをいかたにかけ山々寺々修

行して姫君の後世をそ訪けるをふすまの三郎は

家綱正廣か所領中田下郷めしあけて思ひあたる事をな

かりける女房又の給けるはきゝ給へよ難波の太郎こそわ殿

のむこにならしとて世をすて國々をめぐりて乞食は

すなれもし慈悲はしやぬすみとらんすらん内によひて目を

はなたすはした物につかはゝやとてわつかなるこそて

ひとつきせつゝかみをせなか中よりきりすてゝからかみ

といふ名をつけてそつかはれける吉見次郎草の

かけにてもいかにほいなくおもはるらんかゝる程に武藏

國の先司はかはりて當國司の代となり京まできこえたる吉見次郎か家みんとて吉見の館へそいり給三郎さまゝもてなしたてまつるにはしたものゝなかに

このからかみ侍りけるを國司わりなく心つきにおもひ

なり給ぬしのふおもひいろにいてゝをふすまの三郎にわり

なく所望ありけるを女房妬心ありければさらにゆるしたて

まつらす武藏守歸給て後女房三郎にの給からかみめあれてい

にておきたらはなをもよしなき事いてきなんすさまをかへ

て水しにつかはせ給へとてひとつの小袖をもぬきとりて信濃

のてうたい馬のあさきぬといふものゝあさましけなるをきせて

たてまつりてみとりのかんざしをもとぬきはよりきりすてゝ

からかみといふ名をたに心うしとおもひしにあまさへぬのひと

かへてとをさふらひのむまやの水をそくませたてまつる

つゝわいの水を二十五引疋の馬によるひるくめはかへての樣

なる手もつるへのなはにきれそむしてあけのいとをひきたる

やうなりくむ水もすわういろにそみえたりける母うへかなしみ

なくさめてよるの水をはくみ給へともいまたならばぬ事なれば

たとへやるへきかたもなしたけなるかみをかきたしてきぬの

袖をちかへかたにかけ給てくみ給水におつるなみたもあらそひ

ていとゝたもとそしほれける十六七までみやこにかしつかれ

給へりし時はゆめにもかゝるありさまあるへしとこそみえさりしか

かくてをふすまの女房三郎に申合て國司の方へ案内ま

うさせける心は御目にかゝりし女みせたてまつりて仰に

したかふへしと申たりければいそぎ又いり給へり

をふすまのむすめ十九になるをなのめならずとりつ

くろひていたしたてまつる母にゝ給たるかたちなれば

かほはよこさまにてしかもなかひろなりめにはかな
まりをえりすゑたる様にてまゆはぬきつくろひたる
うへなをかきまゆなりまふしたかくてさしかたなり
ひたひのかみちゝみあかりてしなもなしひとへに鬼に
そにたりけるこれもをやのめにはよくやみゆらん
國司心もとなくおもへるに一日のすかたにはひきかへて
心うし只一目を見給へるそのゝちひとことは物をたに
の給はすうちうつふしてそおはしける色く

しなくのひきいてものたてまつりてこの女房をは
いかにも御心にまかせたてまつるへしといひけれとも
とかくの返事もなくていて給へりいとねのひそ
しのはれ給宿所にかへりておもひあまりに

ふたはよりみとりかはらておひたらむ

ねのひのまつのすゑそゆかしき

をとにきくほりかねの井のそこまでも

われわひしむるひとをたつねん

(繪)